

4. 新しい環境でのチーム作り —本学女子バスケットボール部での取り組みを例に— 佐々木直基¹⁾

Team Building in a New Environment : A Case of BSSC Women's Basketball Team Naoki SASAKI

Key words : 新しい環境, チーム作り, バスケットボール, 彼我分析

1. はじめに

日本における若者のスポーツ活動はそのほとんどが所属する教育現場（中学校，高等学校，大学など）のいわゆる部活動（課外活動）という形で行われている。そこでの指導者は教育現場における教員が行うことがほとんどである。そのため年度末の教員異動によって指導者が突然変更することはごく普通に起きている。

指導者が選手やチームを強化するには、目標設定をし、強化計画を練り、日々の練習を行う必要があることは周知されている。しかしそういった計画のもとで選手やチームを親身になって指導し、選手との信頼関係が築かれていたり、たとえチームが順調に強くなっていようとも一つの辞令によってシーズンの途中で指導者が変わらなくてはならないことに直面してしまうのである。そのような現実に直面した多くの選手たちは突然の変化に混乱し、「指導者が途中で変わってしまった」、「今までいてくれた先生が別の学校に変わってしまった」といったようにその後の競技生活に不便を感じ、納得のいく競技生活を送れないことも少なくないのではないだろうか。

このようにシーズン途中で指導者がいなく

なってしまう一方で、途中から新しい指導者が現れることも同時におこっている。選手たちは今までの指導者とは違う考え方に戸惑い、同時に指導者もシーズン途中で新たな選手やチームを指導することに苦慮するのである。このような場合指導者はどのような点に注意しチームを作り上げていくべきなのだろうか。

内山（2000）は、バスケットボールのチームマネジメントに関して、シーズンを開始する前の準備としてコーチはチームに対して、「コーチング・フィロソフィー」、「年間計画」、「ゲーム構想」、「ディシプリン」を提示する必要性を述べている。つまり新たな選手たちを指導する際は、コーチとしての自分が競技について“どう考え”，相手と“どのように戦っていくのか”について選手たちに理解させる必要性を述べている。特に選手たちにとって、この先どんな練習をして、どんな戦術を使って戦うのかは不安とともに期待を持つところであり、考え方を提示し選手たちの「不安を取り除」き、期待を持たせることが「指導者が最優先すべき仕事」となるのではないだろうか。

このように新しい環境に就いた指導者は、選手たちにこれからの戦い方（「ゲーム構

1) 競技スポーツ学科

想])を伝えなくてはならないが、「ゲーム構想」とはどのように考え、実践させていくべきなのだろうか。

古来より伝わる兵法書「孫子」の中の有名なことばに「彼を知り己を知れば、百戦して危うからず」とある。このことばは、競技スポーツの指導の場面においても用いられることが多く、吉井(1986)は「作戦計画の立案」について、「彼我の戦力を知ることからはじまり、両者の『比較検討』へとすすみ、そして、その結果として、最も勝利を得る可能性のあるゲーム展開の仕方が計画されるもの」であると述べている。つまり指導者は選手やチームを指導する際に、自らが指導する選手の現状や特徴を把握しておくことのみならず、対戦するであろう相手の現状や特徴を把握しておくことが必要不可欠であり、その上で「どのように戦うか：ゲーム構想」を考えるべきである。

このように、新しいシーズンを始める際に指導者が準備し、選手たちに提示すべきことや、計画の必要性や立案の方法についての著述はあるものの、実際にどのように行われ、どのような成果が得られたのかについての著述は少ない。

そこで本論では、筆者が本学に着任したシーズンの取り組みを例に、新しい環境に就いた際のチーム作りがどのように行われ、どのような成果が得られたのかについての一例を報告する。

2. 着任1年目の取り組み

1) チーム目標の把握と達成への条件

著者が本学に着任後まず取りかかったのが本学バスケットボールチームの最終目標の確認と目標達成に必要な条件(力)の分析であった。チームの目標は新チーム立ち上げの際(著者が着任する前)のミーティングで、現状の関西女子学生2部リーグ(以下、関西2部リーグ)から「1部リーグへの昇格」と「インカレ出場」と決定されていた。

そこでまず最初に関西2部リーグを勝ち抜く力がどの程度なのかを把握するため、昨年度の関西2部リーグの結果と関西1部リーグへ昇格したチーム(O大学)の試合結果の調査を行った。O大学は関西1部リーグ昇格にあたり関西2部リーグを圧倒的な勝率で勝ち上がっていた(表1)。

表1. 2006年度関西2部リーグにおけるO大学の成績

	1次リーグ	2次リーグ	合計
勝敗	5勝0敗	3勝0敗	8勝0敗
平均得点	83.8点	75.3点	80.6点
平均失点	56.4点	62.7点	58.8点

試合の得点結果を見ると、単純に考えて1試合平均80得点し、相手の攻撃を60点未満に抑えることが関西2部リーグで優勝するために必要な力であると考えることができた。もちろんここでの調査は試合結果、得失点、選手のレベル(身体的特徴、経歴)など様々な観点で行うことができたが、O大学の得失点に限定して着目したのは、O大学の映像データが手に入らなかったことと優勝チームの得失点という解りやすい指標を用いることで、選手たちに「やってみたい」、「挑戦したい」、「やれそうだ」と前向きに未来をとらえさせるためであり、選手たちの持っている新しいコーチのもとでプレーすることへの不安を取り除くことに重点を置いたためである。

以上のことから、着任後最初のミーティングで選手たちに関西1部リーグへ昇格するための力として「1試合平均80得点、60失点」という目標値の提示を行った。

2) 本学の分析と課題

前述したように、選手たちには「1試合平均80得点、60失点」という目標値を提示したが、現状はどのようなのだろうか。

本学の昨年度の試合結果と直近の試合結果をもとに現状の把握を行ったところ、表2に示したように、本学の昨年度のリーグ戦の成績は1次リーグ1勝4敗、2次リーグ(下位)

2勝0敗で平均得点74.7点、平均失点63.2点、直近の招待試合での成績は3勝1敗で平均得点50.5点、平均失点42.3点と目標値に比べて「得点が少ない」という問題があることがわかった。確かに直近の試合では3勝1敗と勝ち越してはいたが、このままの得点で相手に許す失点を40点台に抑えてチームの最終目標である「関西1部リーグ昇格」、「インカレ出場」を達成することは不可能であり、得点を増やすことは目標を達成する上で必要なことであるのは明らかであった。

表2. 2006年度リーグ戦と直近の招待試合における本学の成績

	1次リーグ	2次リーグ	合計	直近の招待試合
勝敗	1勝4敗	2勝0敗	3勝4敗	3勝1敗
平均得点	68.6点	80.7点	74.7点	50.5点
平均失点	76.4点	50.0点	63.2点	42.3点

3) 得点を増やすための方策

バスケットボールでは、攻撃側が「『なるべく多くの得点』をあげるべく」プレーし、防御側は「得点させないよう」プレーする。そのためいくら得点を増やしたいと考えてもそれだけで得点が増えるものではない。そこで直近の試合のゲームスタッツから「得点の少ない」原因の分析を行った。

表3は直近に行われた大学生との試合における得点およびシュート本数、攻撃回数、ターンオーバーの数である。得点が40点、48点と目標値の約半分に留まっていることがわかる。試合を行う際に意図的に得点を減らし、ロースコアの展開に持ち込んだとの情報は得られなかったため、何らかの理由で得点することができなかつたのである。バスケットボール競技で得点が認められるのはシュートがリングを通過したときのみである。つまりシュートが起こらなければ得点はできないことになる。しかし本学は得点を狙っていたにもかかわらずシュート試投数が56本、49本というシュート本数に大きな問題があると考えることができた。一般的にバスケットボール競技におけるシュートの成功する確率は約50%

と言われる。表3のように56本シュートを放ったとしても得点になるのは28本程度であり、その中に3ポイントシュートが含まれていたとしても得点はせいぜい60点程度になることは大方予想がつくところである。つまり目標値である80点を得点するには、40本（3ポイントシュートを含めると35、36本程度）のシュートを成功させる必要がある。シュートが約50%の成功率と考えたとき、40本のシュートを成功させるのに必要なシュート試投数は単純計算で約80本となる。

では1試合80本のシュートを放つには、何を改善する必要があるだろうか。本学は直近の試合で1試合75回および70回の攻撃を行っていた。しかしその攻撃回数に対し、シュートの試投数は56本と49本でターンオーバー（ミスプレイ）がそれぞれ19回、21回となっている（表3）。

表3. 直近の試合における本学のデータ

	得点	シュート本数	攻撃回数	ターンオーバー
OT大学戦	40点	56本	75回	19回
T大学戦	48点	49本	70回	21回

仮にターンオーバーをすべてシュートに結びつけたとするとシュート試投数が75本と70本となり、約70点の得点を期待することができた。実際にはターンオーバーをすべてなくすのは不可能であるが、ターンオーバーの数を減らし、その分をシュート試投数にすることで得点を増やすことができることは明らかであった。

しかしながら攻撃回数が75回ではよほど高いシュート成功率を出さない限り80点得点するのは難しく、単純に攻撃回数を増やすこともターンオーバーを減らすことと同時に求める必要があった。

4) ゲーム構想（チームスタイル）の選定

以上のように、本学は目標値「1試合平均80得点、60失点」と達成するためには、1試合の中で、「ターンオーバーを減らす」ことで

「シュート本数を増やす」こと、単純に「攻撃回数を増やす」ことが必要であった。つまり本学は攻撃回数を増やすために“ボールを奪い”，“ミスなく”シュートに持ち込む戦い方が必要であった。

そこで最初のミーティングでは上記のような説明をした上で、

- ① 「攻撃回数を増やす」ために『オフENSリバウンド，ルーズボールの獲得』
- ② 「シュート本数を増やす」ために『速い展開の攻撃でシュートチャンスをつくる』
- ③ 「ミスを減らす」ためにパッシングゲームの導入

の具体的な提示を行った。また，それらの戦い方を達成するためにチームとして準備していく戦術の提示を行った。(図1)



図1. ミーティングの際に提示したスライド

前述しているが，最初のミーティングで著者が強く意識したのは，選手たちの「不安を取り除くこと」であり，より具体的にわかりやすく今後の戦い方を伝えることである。そして選手たちが「やってみたい」や「挑戦したい」，何となくだが「やれそうだ」と思えることに重点を置いた。彼我の分析やゲームの分析をより詳しく，深く行い，選手たちにより多くの事実や情報を提供することは可能であったが，情報を解りやすいものに限定したのは選手たちが情報を処理できなくなり「現実味」を感じることができなくなることが無いように配慮したためである。

3. 成果と課題

着任から指導を始めて4ヶ月ほどで迎えた

秋の関西女子2部リーグ戦で，本学は開学以来最高の4位（1次リーグ4勝1敗，2次リーグ2敗）という成績であった。1試合の平均得点は60.4点，平均失点は62.7点と目標値の得失点には届かず，最終目標であった「1部リーグ昇格」，「インカレ出場」は達成することはできなかった。しかしながら準備期間が少ない中で過去最高の成績を残せたことに「着任からのチーム作り」という点で一定の成果がだせたのではないかと感じている。

シーズンの途中から指導を始める多くの場合，試合や大会までの準備期間が通常より短くなる。そのため初めて会った選手たちに指導を行う際には，自らのコーチング・フィロソフィーを一方向的に提示し，指導をするだけでなく，彼我両方の現状を把握し，どのような戦い方が妥当であるのかを検討する必要がある。さらに自らのコーチング・フィロソフィーをもとに限られた時間の中で何を指導していくのかを決定する必要があると考えている。そしてその考えを選手に解りやすく説明し，挑戦する意欲を持たせることで一定の成果を残せる可能性が出てくると感じている。

今回報告した事例は最上級生など，指導を受ける数ヶ月が最後の大会への活動になる選手たちを重要視し，短期間で成果をあげることを大きな目的にしていることは否定できない。このように現在所属している選手たちの一瞬一瞬を充実させてあげることがもちろん重要な課題であるが，2年，3年，5年，10年と永続的にチームが発展し存続していくことはさらに重要な課題となる。そのため2年目，3年目となりチームを長期スパンで，なおかつ準備期間が十分にある際には短期間でチームを作るのと同様かそれ以上に彼我分析を綿密に行い，その数年間を見越した中でシーズンに必要な戦い方を計画し，その考え方を選手に伝え，選手たちが「挑戦したい」，「やってみたい」と思える準備が必要になることは言うまでもない。

最後に，開学8年目を迎える本学は開学以

来の勢いを如何にして継続し、発展させ、揺るぎない土台（伝統）を創っていけるかが求められる時期に入っている。新規で着任した教員が本格的に指導を始めた部活動も年々チームの基礎が固まりつつあり、一歩ずつステップを上がっている。

そんな中で本学の部活動が今後、「チャンピオンスポーツ」という世界で「勝つ」ことを目指していくのであれば、指導者の飽くなき探求心やきめ細かい準備・計画、学生たちの競技への好奇心や高い目標への意欲、大学の部活動への期待や位置づけの明確化、サポート体制の向上といった、「指導者・選手・大

学」が三位一体となった組織作りが求められると考えている。

引用文献

守屋洋（1984）孫子の兵法，三笠書房，東京：pp.61-63.

内山治樹・武井光彦・大高敏弘・柴田雅貴（2000）バスケットボールのチームマネジメントに関する研究：プレ・シーズン開始時におけるコーチの管理行動に依拠して．筑波大学運動学研究，16：pp.77-93.

吉井四郎（1986）バスケットボール指導全書1，大修館書店，東京：pp.73-75.

